



コロナ一色

岡田 安弘

思わず笑いをこらえたことがある。「固有名詞が出なくなっていて困ったもんです」と、80歳すぎの男性。「君はましたよ。僕なんか普通名詞が出てこないんだ」と、その先輩。ふた昔以上も前のことを思い出したのは、二人の会話が身につまされるようになったからに他ならない。

メールを送信しようとパソコンに向かう。相手の名前が突然、頭から消える。顔は浮かんでいる。名前が思い出せない。花の名前、食品の名称など普通名詞が出てこないことも再三だ。

日本男子の平均寿命は81.25歳。平均に1.25歳ほど届かないというのに、記憶の衰えは、もはや人ごとではなくなった。

動作も鈍くなっている。身辺が散らかったまま。片付ける気にならない。「あした出来ることは、今日するな」と唱えていた友人をバカにしていたのは誰だろう。

国会審議の不満をメール賀状に書き散らす。森友・加計、桜の会、公文書改ざんとネタは尽きない。「歳をとると怒りやすくなるとか、ご神妙に」。友人から返信メールが届く。

世の中、新型コロナウイルス一色に染まる。ほっとしている陣営もあろう。しかし、こんな事があったのをご存じですか。コロナ感染防止対策会議で、専門医は外出自粛目標を「8割減」と提案。陣営は「少なくとも7割減」と勝手に付け加えた。医師は「完璧に8割減らさないとコロナには勝てない」と、陣営を批判。対策会議の組織変更の折、メンバーから外された。

気になりながら、手付かずのことは誰しもある。外出自粛で、積読(つんどく)状態の本を手にする。先ず末尾の「奥付」を見るのを流儀にしている。いつ買ったか思い出すためだ。ものぐさを反省、何年ぶりに読み始めた。

ゆっくり考える時間をくれたのもコロナだ。核兵器を製造して、誰が利益を得ているのか? かねての疑問は、ネットのおかげで解けた。

ノーベル平和賞を受賞したNGOの「ICAN」とオランダの平和団体が共同で、「核兵器にカネを貸すな」と言うプロジェクトを展開。米、英、仏、印、オランダの計20社を核兵器製造企業と特定。この20社に投資や融資をしているか、世界の金融機関を対象に調査したそうだ。

2018年の報告書(ホームページ)によると、2014年から3年間に24か国、329の金融機関や保険会社などが、総額5250億ドル(約55兆円)を投融資していた。うち日本は7金融機関の総額1.9兆円だった。

投融資の禁止を宣言したのは、世界で63金融機関。日本では大手のA銀行が唯一。「社会的責任投資に向けた取り組み」と題する文書で、「核兵器、化学兵器、生物兵器などの製造企業へは融資しない」と宣言した。ここでは仮名にしたが、プロジェクトの報告書は銀行名を明記し、世界に発信している。

国内の他の金融機関は、問い合わせに対し「回避する方針は策定している」などと回答するも、禁止の公表には至っていない。

人類への警鐘

「暴れ川」と呼ばれる熊本・球磨川の氾濫で、川沿いの養護老人ホームが水没した。職員と付近の住民が、車いすや寝たきりの高齢者を2階へ避難させていた。突然、濁流が押し寄せ14名が呑まれた。傷ましい。

こんな危険な地形に、老人ホームの建設を認めたのは誰?と聞きたい。横着にも程がある。

▽

新型コロナウイルスの蔓延にも同じ事が言えよう。人間は様々な技術を手に入れた。進化と同時に地球の営みを歪めてきたのは否定できない。環境破壊に自然は怒っている。生物の一員である人類への警鐘と覚えてならない。